

学校司書おすすめの本

読書の旅へでかけよう!



『楽しく学べる歴史図鑑 土偶』
山田康弘/著
スタジオ タック クリエイトィブ
210

土偶は何のためにどうやって作られたのか。はにわと、どう違うのか。土偶の種類や歴史だけでなく、縄文時代がどんな時代だったのかわかる本。縄文時代は意外と長い。



『絵で旅する 国境』
クドル/文 ヘラン/絵
なかやまよしゆき/訳
文研出版 329

日本に住んでいるとあまり意識しない国境。家の中やベンチ、鉄条網など様々な形がある。国とは何なのかを考えるキッカケにもなる一冊。



『はじめまして 赤い星
人が火星に住む方法』
エドゥアール・アルタリーバ 他/著
わたなべじゅんいち/監訳
いとうのぶこ/訳 化学同人 445

軌道や重力を計算し、太陽風や宇宙線を乗り越え、火星までの旅は約10か月。今はまだ探査機だけが到達しているけれど、人類が火星で生活する日も近い?



『絶滅体験レストラン
もしも環境問題が13の飲食店だったら』
WoW キツネザル/著
澁谷玲子/イラスト 山と溪谷社 519

すべてを焼き尽くす山火事ラーメンに、溶けだした氷河で作ったメルトバーガー。食べて体感すれば、他人事ではいられないこと間違いなし! 環境問題を新感覚で考えよう。



『こんにちは 弱いロボット』
岡田美智男/作 早川世詩男/絵
偕成社 548

間違えたり、手助けが必要だったりの「弱いロボット」たち。高性能でスマートなロボットの真逆に行く彼らだけれど、とても愛しく感じられるのは、なぜだろう?



『子ブタたちはどう生きたのか
ぶうふうう農園の7か月』
太田匡彦/著 岩崎書店 645

食用豚の大半は、効率優先の劣悪な環境で一生涯を終える。一方で、のびのび豊かな「豚生」を模索する農園も……。命を頂くという事を考えさせてくれるノンフィクション。



『これから大人になる
あなたに伝えたい10のこと
自分を愛し、困難を乗り越える力』
サヘル・ローズ/著 童心社 779

俳優サヘル・ローズが、自身の試練に満ちた子ども時代と、その後の支援活動で訪れた地での様々な出会いを綴り、私たちに生きる上でのヒントを語りかけてくれる。



『5文字で百人一首』
すとうけんたろう/著・イラスト
講談社 911

31文字の百人一首を5文字に! 読んでびっくり、確かに言いたいことは伝わってくる。こんなに省略しちゃって…と笑いながらも、和歌がぐぐっと身近に感じられる一冊。



『業平センパイの読書会
堤中納言物語』

花形みつる/作
偕成社 913

古典研究部の業平部長は部員集めに悩んでいた。古典の面白さを知ってもらうため、読書会を企画する。平安時代の恋の駆け引きやオシャレ事情に女子達のツッコミが止まらない。



『そして少女は加速する』

宮田珠己/著
幻冬舎 913

陸上部員であれば、一度は出てみたいインターハイ。短距離の試合は春から始まる。練習の苦しさ、負けた悔しさ、ケガの辛さ、プレッシャー、すべてをかかえて勝ち上がれ。



『みかんファミリー』

椰月美智子/著
講談社 913

隣のクラスの生き物オタク、野々花の家族と一緒に暮らすことになった美琴。女ばかり6人の新しい生活に、とまどいながらも絆を深めていく。タイトルの「みかんファミリー」の意味とは？



『インド象の背中に乗って』

小手鞠い/著
小学館 913

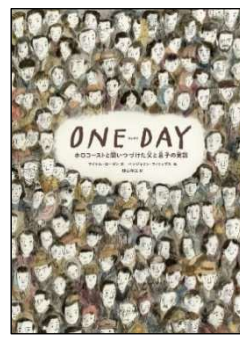
父が仕事でインドに赴任することになった。インドに興味がなかった三葉は日本に残ることにしたが、ある絵本に出会い、インドの魅力にぐいぐいと引き込まれていく。



『Garden』

8月9日の父をさがして』
森越智子/作 童心社 913

僕にはふたつの名前があった。名前の秘密は、奇跡的に原爆の惨禍から逃れた、父の秘密へとつながっていく。8月9日。あの日の父の足取りと思いをたどる物語。



『ONE DAY ホロコーストと
闘いつづけた父と息子の実話』

マイケル・ローゼン/文
ベンジャミン・フィリップス/絵
横山和江/訳 鈴木出版 235

ナチス・ドイツに占領されたパリのユダヤ人収容所で、希望を捨てない親子がいた。生き延びるためにトンネルを掘り、列車から飛び降り、力を合わせて逃げようとした。



『探検家』

キャサリン・ランデル/著
越智典子/訳 ゴブリン書房 933

飛行機が墜落してアマゾンに取り残された4人の子どもたちは、必死でジャングルを生きのびようとする。ある日、自分たちより前に人がいた痕跡を見つけた。誰か近くにいるのだろうか。



『涙の箱』

ハンガン/作 きむ ふな/訳
評論社 929

ある村にひとりの子供が住んでいた。その子は「涙つぼ」とよばれ、些細なことでも涙を流した。ある日、純粋な涙を探し求めて、見知らぬ男が訪ねてきた。



『金色の切手と
オードリーの秘密』

オンジャリ Q.ラウフ/作
久保陽子/訳 静山社 933

病気の母親とふたりの弟の面倒を見るオードリー。発作を起こした母のため、まとまったお金が必要になり、無鉄砲な行動に出る。家族を見守る周りの人々が温かい。



『エイダンをさがして』

デイヴィッド・レヴィサン/作
三辺律子/訳 小峰書店 933

6日間行方が知れず「ようふくだんす」から別世界に行っていたというエイダン。誰からも信じてもらえず、好奇の目で見られ、傷つき葛藤する。そんな兄を信じる弟の視点で描かれた、行きて帰るし“その後”の物語。